

# 妙安寺だより

テレフォン法話 092(751)6084

## 盂蘭盆会 (うらぼんえ 梵語でウランバナ)

インドのバラモン教の信仰の中に、夏に行なうものとして「魂祭り」と呼ばれる祖先の霊を祀る習慣がありました。インドという国は有史以来、宿命的に流行病が多く、とくに夏は天然痘やコレラが流行し、また、川の水で身体を洗いその水を飲んだりするので、消化器疾患が蔓延することがありました。これを防ぐためには祖先の霊魂をよく祀り、死の世界からなるべく遠ざかるようにしなければなりません。

これを怠ると祖先の霊魂がやってきて、自分たちを死の世界に連れて行かれると考えられていました。そこで、インドでは祖先の霊を祀ることが、夏の最も多くの人が死ぬ時期を選んで行なわれるようになりました。これを「ウランバナ」といい、この信仰が中国を経て日本に入ってきました。

### 【位牌＝墓】

大化改新の後にできた「大宝令＝たいほうりょう」という法律によると、位の無いものは墓を造ってはならないと記されており、一般民衆は、人が死ぬと山に捨ててに行きました。（捨てたところを山墓、捨て墓と呼びました）

もう一つ、拝み墓というものが各自の家の庭に、一本の木の棒や石塔を立てていました。

墓を庭から室内に持ち込んだのが位牌で、世界中で日本しかありません。

位牌というものは、墓の形をしており、捨て墓に対してお祀りする墓が位牌なのであり、だから、昔から火事があったときなど、なにをおいても位牌だけは持って逃げるのは、祖先の霊魂が宿っている墓を焼いてしまったりしては大変なことなのでありました。

### 【迎え火と送り火】

昔からお盆の日には、まず山に行って捨て墓をお祀りし、そこでつけた線香の火を家へ持って帰って、門口でそれを火に変えて迎え火を焚く。迎え火というのは、麻の繊維を取り去った芯の部分のオガラを燃やし、その炎と一緒に祖先の霊魂が家にやってくる、つまり火が魂をお迎えするという信仰なのです。

火というのは「たましひ（魂）」の「ひ」であり、燃える火と魂とは同じものだということで、魂の象徴である火が捨て墓から里墓を通じて仏壇までやってくるのである。

魂を迎えた家族たちは、なつかしい祖先に会った気持ちで、そこにいろいろなお供え物をして、線香をあげたり、お経を唱えたりしてお祀りするのです。

お供え物には、祖先の方が生前好きなものであった食べ物をお供えします。

門口で送り火を焚き、地方によっては、その火を川に流す習慣があります。それが「精霊流し」で、灯籠に火をつけてお供えをし、瓜、茄子などと一緒に霊魂を川に流して海に送り出すのです。

## お盆お施餓鬼法要の案内

8月18日(月)	正午	おトキ
	午後1時	お施餓鬼法要
	午後2時	法話

なお、ソトバ供養御希望の方は、早めにお申し込み下さい。 1霊位 2,000円

### お盆回向について、

13日、14日、15日の3カ日間 午後4時より、お盆の読誦回向をいたします。

